

木曾街道膝栗毛

く 前 書 き く

『木曾街道膝栗毛』は、東海道中膝栗毛の弥次さんと喜多さんが、お伊勢参りを済ませた後、中山道を通して江戸へ帰るお話です。

作者の十返舎一九の代表作『膝栗毛』は、文化・文政期のベストセラ―となり、一九は、一躍流行作家となりました。

この作品の主人公である弥次郎兵衛と喜多八の愉快的コンビが繰り広げる、楽天的で無邪気な珍道中は、当時の庶民たちに歓迎され、長く愛読されつづけた作品になりました。

これに気をよくした一九は、『続膝栗毛』を執筆するため、その取材に信濃路へ草鞋を履き、各地を歴遊しました。

この時の紀行文は『滑稽旅賀羅寿』です。

その後『木曾街道膝栗毛』が執筆されました。

平成十八年十一月三日 発行

木曾街道膝栗毛 く木曾十一宿の弥次喜多道中物語く

原作 十 辺 舎 一 九
訳者 奥 原 修

長野県木曾郡木祖村小木曾在住

木會街道膝栗毛(その一)

〜落合宿より馬籠宿まで〜

弥次さんと喜多さんは、山道をたどり、またなだらかな道を歩いて、ようやく落合の宿に着きました。

宿場入り口の棒鼻茶屋では、お茶酌みの女が、往來を行く旅人に声をかけています。

女「お休みなされ、お休みなされ。

煮しめのできたてもございますに。

なあ、お入りなされ、お入りなされ」

すると、茶屋に休んでいた籠かきも寄ってきて、二人に声をかけました。

駕「旦那様、安く行きますよ。

どうぞ駕籠にお乗りください」

弥次さんと喜多さんは、首を振り振り言いました。

弥「いやいや、駕籠には乗り飽きた。乗る気はないよ」

と、言いざま通り過ぎようとするど、

駕籠かきは二人の後をついて来て、

駕「そんな事を言わせずと、乗っておくんなせい。

この宿場で出会ったのも何かのご縁です。

わしらが旅のお方を助けにやアいけません。

まあお聞きください」

そこまで言うど、相棒の男が話を続けました。

駕「今、米が一升百文もする時代になってしまっど、

みんなが働いています。

そんな折りもあり、

家の女房がこの間から下腹や腰が痛いと言い出して

寝込んでしまいました。

わしあ面白くもねえから、

ちよちよと一杯飲みたくなりました。

どうか、人助けと思っど駕籠に乗っどくんなんしょ。

「お願いします。」

と、手を合わせて頼んでいます。

ここまで聞かされると、お人好しの喜多八は、ついその話に乗せられてしまいました。

喜「いくらで乗せるかな」

駕「あてがい、ようござんすよ。」

貴方の好いようにしてくださいよ」

喜「そうかいそうかい。安くしてくれるんだね。」

弥次さん、お先に出かけて下さい。

おらあ、どうしたか足が少し怠けてきたので、

乗せてもらおうよ」

と、ここで駕籠賃の話がまとまった喜多八は、駕に乗って出発しました。

先に行く弥次さんも、急な坂道を右へ曲がり、左に折れて、見え隠れに進んで行きます。

十曲峠は、急な坂道をいくつもいくつも曲がって上っていく先にあります。その急な坂道をいくつか曲がったところに、大きなお寺の門と松の木が見えてきました。

寺の門の前では、「狐の膏薬」という看板を出して薬を売る店が目につきました。

この店の主人らしい人が、軒先で大声を張り上げていました。

主「さあさあお買いなすって下さいよ。」

この名物は狐の膏薬―旅の途中で足を痛くされたお方にはまことによく効きますよ。

ほかに、腫れもの・切り傷など何だって治してしまいます。

この薬のすい出しは、めっぽう素晴らしくて、お金持ちの金銀はすべてこちらへ吸い寄せてしまうほどです。

また、貴方が好きな女の方なども、この膏薬のひと塗りです。たびたと吸い寄せてしまう程です。

さあ、お買いください」

これを駕籠の中で聞いていた喜多さんは、

喜「いやあ、こいつはおもしろえ。

籠屋さんちょっと止まって下さいよ。

もしもし、その膏藥はわしの好きな女の人を吸い寄せてくれますか」

主「吸い寄せてくれますとも。

もしだめなら、膏藥紙へのばさずに、小判へのばして、

その女の方に貼り付けてやりなさい。」

喜「こきやがれ。大方そんな事だろうと思った」

こんな具合に、二人は楽しく進んでいきますと、石畳の道・立場茶屋・馬籠宿・そして峠の茶屋までやってきました。

峠の茶屋では、この土地の名物「栗の強飯」を口にして、その美味しさに舌鼓をうちました。

弥次さんは、早速一首吟じました。

渋皮のむけし女は見えねども

栗の強飯ここの名物

元気を取り戻した二人は妻籠の宿をめざして峠を下りて行きました。

(註)十返舎一九は、『続膝栗毛(木曾街道膝栗毛)』取材のため、信濃路各地を遊歴し、見聞や体験をまとめて上梓しました。これが『滑稽旅賀羅寿』です。

この中で「馬籠宿大黒屋前のいさかい」「立場茶屋の巡礼女」(大桑)、「枝付すりこ木」(寢覚の床)、という痛快なお話がありますが、これは膝栗毛の二人が登場しませんし、別のお話ですので紹介だけにとどめます。